



嫩髮蛇物語



特
遠 13
1298
4



1298
4

嫩髮蛇物語卷之四

江戸 全亭主人戲編



第七回 山寺の門碑 宮根の私雨

さてこの... 且説... 懐と探して荷物と切解... 多々の踏用を掠め取... 大い悦び法師の居間... 甘々と斯仕負せて... 後... 此一群の根絶...

蛇の巻四

一

せんといへば實ぬの悪少年等等一庭へ踊り出爰の隅々彼奴の隈々
 火と照しけり需むども影見えざる高垣の外面へ出く二三町彼方此
 方と叢を往違ひしつ悪少年等樹萱と分ち様々ふわるぐり未く尋れ
 ども更お往方の名をば詮方なく何処ある迹足速き小童めと謔さ
 けぞ歸せけるが是て後日の事頭をんさかぞより其々ふを隠さんぬ
 ちどとも斬散しける亡骸の邊りの深き溪底に携へ行く轉し墮し今
 夜の中も左も右も自等が身の往來をも斗らんぞと蟠竜の掠め取る
 沙金のうち渠等お聊配分與へ有合ふ雜具も残るる馬お負せて跡聞
 ち。西と東へ散々お自が隨意々走本けり斯く是より蟠竜此管根る縣
 令微塵忽平と呼者に従弟あり然も又彼も無頼の曲者ある如駁

馬の合口同士のさうさうに別つ。執権もその内意の後の便ふ言
 ちんと。蟠竜縣令忽平が館お音信有。光景と唱。一封の沙金をお跡の
 事ども。たむ。計りひとと話説と。忽平金を押戴さるを笑しつひ
 ける。さても由縁の中る依是丁寧の賜物とあるから執権の御前自
 が計りへ。心置る。退き。自か切る志と然して後お知りぬ。其が執
 権の親族の。微塵もぬ微塵忽平。欲お引る面のり
 鉄面皮をを答ける。蟠竜速くも暇を。何処ともなく出たり。さ
 今勿心平の頼お鎌倉へ至り。執権右京大夫義時お見え。蟠竜お介々の
 旨趣聞えけり。義時ゆき。暫時思案。其を斯々と耳お口を再さ。其
 其禁制の文章の彼様々お記せりと。ひ。忽平掌を打く。今おとめ

執権のげも謀妙かりと大に感一穴賢人や聞くと其処る暇と告て退
 たり。斯も密ある斗ふひと知る者更なるり。却説免七の井出の
 御とまゆの夜と日継り道と急ぎ一個物真く鎌倉へ歸り来とまこと
 顧とて亭主の手前も面を。とどひも言方多。漸々家入りの
 主とて家内の者ホると免七の歸り来。と甚不審く問ひけ免七
 の。打向ひ彼宮根ある地獄寺ふ不意も難逢ひ朋輩ホと失少く。
 命う。漸々と独遁と逃出つ彼足柄の林下る。井出の郷と呼ぶ處ふ
 淵着る一夜と明し。危き命と助り。面臥ある事多。只自の歸り
 来。一五十一の有様と落も残る話説と張六審ふ光景とめて大に
 驚き隣伍の人とも呼来の頃ふ失はる徒者どもの親族も呼集ひ上と

下へ。騒ぎ種々様々論へ。今更詮方ある。峰々と徒ふ大死せと
 せ。其終ふ過とやの非と足て果トと張六も隣伍の人等と商
 議多。此由審ふ書記。先此御の縣令ふ免七と率く訴出と縣令の
 張六ふ打向ひ。彼地獄寺と呼ぶ寺の宮根の奥の縣令微塵忽平と
 呼ぶ者の預り居る処と。彼所ふ至り此旨趣を訴へ事と糺す。
 下司ホ下知あり。事の光景と審ふ證。張六ふ与へけ。王從
 件の批准と得。隣伍の者ホと引連。直に宮根の縣令微塵忽平が
 許へ至り。訴へ。此縣令忽平の執権と。の内意と得。彼蟠
 龍と衆共の謀。合せ。事多。彼者どもと呼ぶ。事の光景と問究。
 縣令の声勅誇。張六ふ打向ひ。汝知。彼省の人を葬る寺院ふ。

官事と裁断る問注所の別館ゆく。武士とあへども政更預らざるを境
 内ぬ根ふ入まざる扱ゆく。其が理と門前北条殿の記さま。嚴死標
 榜と建らま。斯禁制の有はるを。賤と汝等いつふして。此境と不越つらん。
 且汝等が訴出。住僧とそ彼所あへむ。彼境内ぬ執権より。建置さ
 る非田寺あり。是は世別く便した。鰥寡孤獨の貧乏民の病者と憐
 らぬの。薬とあつる薬園と。醫王の像と安置せり。是堂守ぬ一個の僧
 わり。是の寒や中々か。事とあすのあへむ。其の外ぬ僧あへむ。
 其も左も右も此と。総くかのき預る境と。訴出ぬ一件を乳
 明あへく得る。免七汝あへむ。斯る嚴き扱と背境を犯す
 罪入ると。免七仰天あへむ。斯る扱のある寺と。知を入りぬ恐

けま。吾明輩の斯なる。敢て非命の死と遂と。庶幾の憐とあへむ。
 彼賊僧等を捕へら。罪と乳明あへむ。渠ホが親の怨も晴け。君が恵と
 畏と。彼邊りぬ汝と。率とゆき。死と乳と得る。下司ホと命と
 下。彼免七。楮と懸と。張六并隣伍者等。且害せと。親族此
 一件の者ホと引連。境ぬ入り。事の旨趣と明白ぬ乳明あへむ。縣
 令の命ぬ忘。下司ホと畏と。渠ホと誓固と。彼寺の。只見と。門
 の傍ぬ高標建り。

関内是計論機密之席也



免七
暗平
虎口
のろ

虎口
免七

五



虫
物
言
卷
四

四

固禁紛雜參政曹之外

無故不許輒入若有到來

則可處嚴刑因扁諫焉

月日 義時奉之

と記せり。免七を仰ぎ見せ。大ぬ敬篤さ先づ頃爰ホ三つ折節ゆ彼
葦酒山門ホ入と憚らむと書く。甚異やる碑銘ありと其ホえとれ
討く。斯る標榜の建よりと更ホ心の着ざり。と後悔せむと詮方
き。斯く下司ホの縣令より官諾と取出。門内ホ斯と言ハる内ホ
一個の小者まじり官諾と受取。内ホ入が暫く小門の方より呼入ぬ
諸張六等下司ホは空の境內ホ入ける。免七とて彼方此方連歩行つ

有一夜の光景と審の尋問へ。免七其節斯く。彼法師ホ率い
此處を酒を酌る。庫裏ホ入り宿り。夜半ホ朋輩ホの害せり。
光景審ふゆめ下司等と華採。一々此由多。つひ。直ホ渠ホと
引率。縣令の館へ立歸り。光景をゆえ上げ。縣令と々畢。先
免七とが固固敷敷。其餘の者。旅館ホ宿せ下司ホと
警言固く在。張六等。大ぬ敬篤。斯る。夢。今
も皆捕。成。事。安。無。け。
此折柄旅舎の真主。張六ホ。打向。密。語。ひ。吾子。不
意。斯。災。係。物。憂。も。總。今。の。世。
財。世。者。寛。の。罪。財。抛。の。罪。也。追。世。の中。あり。

縣令の意を知りぬ。此禍も逢ふ。便ち死事あり。張六は
 をばむ。自こも富り。程ゆめ。聊財の貯へ。希
 已等が罪。贖ひく。一封の金を取出。亭主は只顧言
 下。先酒肴を調へ。此処と盛言固る。下司等も
 密ふ。是と言入。下司は悦び打寤。宴あり。張六は打向ひ
 已等が斯警言固る。唯官の捉あり。罪を犯せ。人もの。古御お若く
 所用もあ。亭主の計。必己ホ。心遣ひ。ひそ
 交り深。いひゆる。黄金水の驗あり。亭主其より。固圍ゆ。酒食を贈。下
 吏等。賄賂と遣ひ。先免七。人と憑。儲張六。ひける。密ふ。省の下
 吏。免七。の光景と。斯る嚴。捉ある。境を越え。罪人。近

中。の執権。の沙汰。の下。速。斬。の。張六。大。驚。の。金。と。切。の。渠。が。命。と。救。の。使。の。教。受。の。亭主
 の。中。の。執権。の。命。と。の。仲。の。賤。の。己。ホ。が。智。恵。の。力。も。及。た。と。苦。々
 敷。を。答。ひ。の。張六。の。魂。も。天。外。の。飛。心。地。と。い。う。や。ま。う。と。猶。豫。不。定。か
 先。ち。光。景。と。古。郷。へ。審。み。是。と。言。送。の。親。族。と。更。ゆ。の。免。七。が。表。太
 其。外。手。代。亦。迄。も。徒。ひ。の。管。根。の。山。踏。打。越。え。の。此。旅。舎。の。集。ひ。を。言。さ。ぬ
 眼。を。閉。く。默。然。と。慮。を。疑。ら。せ。光。景。の。一。が。眼。を。か。ひ。と。張六。向。ひ。言
 ける。吾。子。免。七。が。罪。と。宥。め。ん。の。便。ち。免。め。の。今。執。権。の。子。息。を。泰。時
 君。お。仕。と。英。多。巴。治。郎。と。呼。が。人。と。昔。の。知。已。あり。其。の。便。く。計。り。ひ

且失う一人々の怨と裁けん便の有らんといふ各々の頭を
らひんぬへうといふを表太の装ひも。旅舎の各の暇とて只一個鎌倉
さうくぞ下をける。正是今表太が知己と憑む巴治郎の昔いふ所由あり。
其も次の條に審は説ん

第八回 鈴鹿の夜嵐 松が根の放鳥

却説今彼表太が知己と憑む英三の巴治郎も且一條の話説わ。此巴
治郎といふ者の従来平家の従臣も。内府宗盛公の圍人あり。平
家亡びて後浪々の身となり。八十歳かちる母と幸く。伊勢國英三郷の
本り。聊の知己と憑む。其処に住る。正治二年の五月ごろ母を疾し流

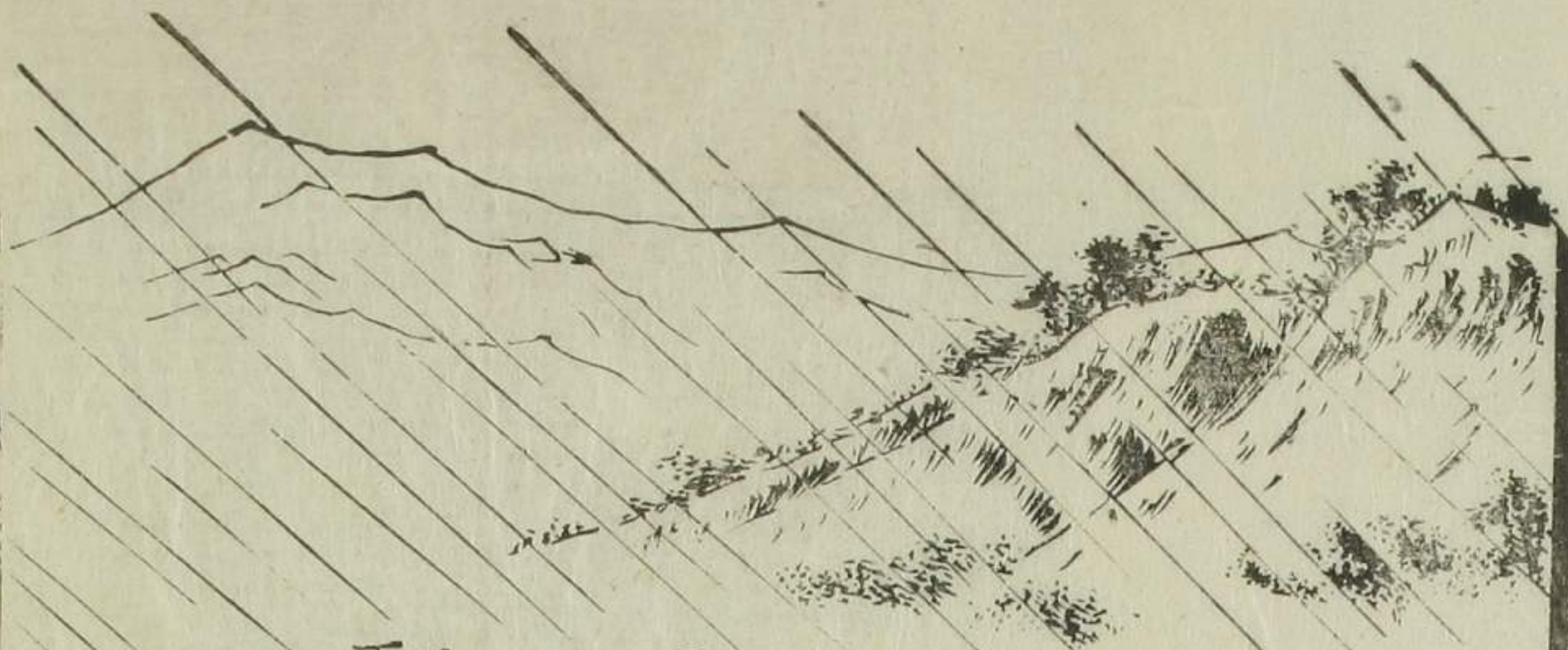
左右食車の進まらば責む川邊の魚と得。疾臥を母と供さん
と。巴治郎も釣竿と振らびの曇りながら五月雨時。巴が家とて水
山高まると八十瀬川の邊りお至り釣と垂る魚とぬんをひける折の
く。少る魚のひらもぬるひま。所やめ。と彼処。次弟々逆
上り。川邊に添。山踏。水上ま。尋のむりて聳え。居
殿のうへ尻懸。水の委り。流き。巡る川水。心移。居
折。鈴鹿の。遥其方の巔。二朶の雲。空一面。廣。一天墨。流せる如。篠と束。驟雨。散。降。来
ま。巴治郎。傍。釣竿。投。捲。手巾。頭。纏。向の方と
雨と凌。木。陰。や。森の茂。分。入。尋。折。向の方と

見よのまご前まへ面おもて一基ひとこしらの鶏栖とりのまごまご。甚い神かみささ。祠ほくらあり。板戸いとうら崩くづままて
 軒傾のたかまま天井てんじやうへ蜘蛛くもの網あみよよ。覆おほひ板敷いとうらの狐狸きりの足跡あしあとよよ埋うめむむげげ雨あめ
 つゆつゆのの社やしろよよ。軒のたか一枚ひとひらの額がくかかままり。何いる神かみの御社みやしろああんんと額ひまををののび
 と伺うかがへへ就つ馬うまの宮みやととままごご。巴治郎とちらうとと和泉いづみるる大鳥郡おほとりぐんの齋いひままの
 日本武やまとぶの御神みかみああるる。左ひだりままごご右みぎまれ額突ぬづまと雨あめの暗間くらまを待まちべべとと崩くづままり
 玉階たまかと踏ふままりり。社やしろよよ入いりりととイいとと。振ふ仰あや向むかひひ只見ただみとと誰たれが願ねが事ことあある
 獻けんけん懸けんああるる古繪馬ふるえうまの半なかの崩くづまま半なかの曲まがと鷹たかの翅はねを断きままり長押ながおし
 取とりり馬うまの足あしを折おららままり柱はしら横よこらら。何いままのの縁えり離はなれれ欠損けつそんに墮おちちかかるる
 其その中なかの松まつの遠枝とほえ止とどままり鳥とりの首くびの無なささと画えくく。新あらたらら絵え馬うまかかままり。
 巴治郎とちらう眉まゆを打うちち皺しわめめ甚い不審ふしんととひひけけ。吾われ聞きくく鳥とりと画えくく先まづ其その首くびと

始はじめ画えくく。何いちち斯す彩さい色いろも濃こふふと畫えくく。繪馬えうまああるるふふかか首くびと
 画えくく。獨ひとりぢぢららほほひひけけ。其その事こと實じつととままりり。美うまま一ひと枝えだの筆ふでわわらら自おの自の拙ちがひ
 業わざああるる。鳥とりののかからら後あと画え添そへへ。全ぜんくくままりりとと蓋ふたく折おらら。社やしろの隅すみの味あじ莫なささ。ああららふ
 一ひと個このの声こゑああるる。巴とち治らう推おししるる。毛け筆ふでののいいどどままりり。氣け辞ことば色いろ治とち郎らう駭おどろかかるる
 ままりり。顧かへりり。其その丈だけ高たかく肥こ太おやや。眼まなこ圓まるふ色いろ白しろく。身み一ひと腰こしの刀やいばと横よこへへと
 もひもらら。雨あめ宿やどりのの繻すの衣えの捲まききらら。巴とち治らう前まへかかままり。禮れい讓じやうととらら
 けけひひけけ。何い所ところの王おううああるる。自おの自の邊へらの住すままりり。此この明あ神かみのの前まへをを
 過ありり。不ふ意いも雨あめの逢あひひ。ままりりと社やしろ雨あめややり。ままりり折おららの眠ね氣きうう。竟つひ現ま々ま
 と真ま眠ねが貴き君きみが繪馬えうまととののぶぶらら。獨ひとり言ことばはは。宣のたまふふ。目め覚さめめ。其その光あ景けい
 已いも前まへ社やしろ入いりり。此この繪馬えうまとと不ふ審しんが筆ふでと添そへへ。早はやののげげ。面おもて白しろく



彼は侍の率々筆と採ぬと件の
 繪馬をとり下して巴治郎が前
 居る勸る詞は巴治郎答へて打笑
 己は彼虎の英三の郷に住る
 者よくいふ此頃續く五月雨
 川水まゝる八十瀬川得のや
 あ〜んと釣竿をび餌みひて
 此山踏水上さうく分入ふ自
 降る俄雨の晴間を待人と御社
 へり異なる此繪馬の画のさか



見と不審ひの鳥呼ぶる詞と
 吐く何のや傍ふ是
 貴人の在ま〜と面臥る事
 めのひりといふ答へて彼男斯
 社に見えぬもいふる縁ゆ有
 け〜んと打笑ひつ只顧筆と
 與へ勸る巴治郎従来いふ
 画と嗜する事のま〜と
 固辭も本意あ〜と筆押採て
 さう〜と鳥の首を画添へは



這枝の松の撓なみ々々枝えだふ就つ鳥とりの止とどまり形かたちとありぬ彼かの壯さむら夫と見みるま掌てのひらとと礎いしと拍うち
 けううらうら笑わらひや實まこと人ひとととげげふふ画え工いありありり斯かくるる才さい子しもも在ありりとと打うち悦よろこびびくく言ことけけらら
 巴あまが家いえのの此この山やま路みち四よ五ご丁ぢやう彼かの方かたよよいいるる幸さいひひ雨あめのの降ふ止とどままばば庶しよ幾いくのの立た寄よるる
 空そらのの光あかり景けいもも見み東あづまををのの雨あめ具ぐあるるとともも奉ほうやや世よのの善ぜん悪あくごとごともも打うち語ごんん
 去い来き速すみとと率すゑへへ巴あま治ぢ郎らう自みづかとと讚ほめららるる人ひとのの詞ことばのの面おも白しろふふ母ははのの心こころののとともも
 忘わすれれとと人ひとのの情なさけとと空そらををららるるとと遠とほのの深ふか山やま邊へ率すゑのの至いたりりゆゆべべ昔むかし豫よ
 讓あづかりり云いふふ事ことありり士し為な知ち已ぢ者ぢやう死し女によ為な説せつ已ぢ者ぢやう容ゆるとともも是こゝもも夜よ初はつのの言ことば
 ろろうう。巴あま治ぢ郎らう巴あまがが才さいとと賞あづかりりせせららるる詞ことばはは迷まよひひくく老おるる母ははとと忘わすれれるるのの心こころ自みづかのの遂すゑ
 命いのちとと失うしなへへららるる事ことあるる。壯さむら人ひとのの過とがありりかか。且かつ説せつ彼かの壯さむら夫と巴あま治ぢ郎らうとと
 率すゑひひくく。鈴すず鹿かのの山やま路みち奥おく深ふかくく入いりり往ゆふふ巴あま治ぢ郎らうへへ見み馴なるる細こま路みちをを几いく半はん里りののままりりも

木き末すえははくくんんととゆゆふふ。大おほ樹きのの茂さかまるる中なかにに丸まる木き柱はしらにに藤ふじ蔓つたのの打うち纏まとひひのの造つくりり
 ありり。甚おほ大おほききのの門かどののひひけけをを。彼かの夫と指さしささすす。是こゝをを巴あまがが住すむむ庵いほをを去い来き入いりり
 ぬぬへへ喧わづ響なみみ内うちよりより五ご年ねん余あまりのの壯さむら夫と出で来きぬぬ。今いまアアをを帰かへりりゆゆひひけけはは雨あめ降ふ
 るるとと困こまトトゆゆひひめめとと。引ひ率すゑははいいるる。巴あま治ぢ郎らう後あとにに従したがひひ入いりりくくるる家いえのの
 内うちにに廣ひろららううああるる。坐まのの半はんにに團だん爐ろありり。大おほききのの金かね一ひと口くちとと懸かるる。傍わきにに年としのの比ひ
 二ふた十じゆ年ねんををるる又またにに廿ふた歳さいあありりるる膏わづづづ肥こふふととるる壯さむら夫とホホ各おの美み々々にに装よそひ
 へへ。長ながきき太おほ方かたのの不おそ畏そくく造つくりりああるるととああるる。傍わきにに置おけけ。四よ五ご人にん輪りん坐ざふふ居ゐるる並なら
 びびにに。彼かの率すゑつつとと来きららうう。壯さむら夫とのの各おの打うち向むかひひ巴あま治ぢ郎らうとと指さしささすすととゆゆくく。此こゝ
 實まこと人ひとにに兼かみくく吾われ黨たうのの慕まほしし憑たままりり待まち設まりり。彼かの才さい賢けんとと壯さむら夫とをを。今いま日ひ
 もも不おそ意い見みええ奉ほうややとと幸さいひひふふ爰こゝにに率すゑひひ参まゐりりととるる。各おの今いまよりより此こゝ君きみとと

此の物語

十一

棟梁と仰ぎ尊く萬の支とせえ上ぐとのみ皆々ほはくもの賓人も
 訪来ゆりののぬ今日ゆる巴等君み従ひ奉るべし。憐れぬくうらむといひ
 大盃と採出は。大さる猪の太股の前かゝる大皿の盛盆のうへ居る
 持出の彼率ひ一夫の先盃とりく巴治郎み打向ひく。さすを君も不審とも
 見ゆゆの抑吾黨の鎌倉の北条父子が計らひなり。或は寃み討て亡く。父
 を亡ひ子を棄つ親族も散々別とて竊む残黨ゆく。爰み聚る黨も皆
 世と死心むる者等なり。是は自ら前年元久の頃亦も帝王の勅諭を受
 日永の里の城郭と構へく北条父子が邪曲を滅さんと志する一は運命つ
 るくく彼北条が一族は。武藏守朝雅み亡く。若菜五郎が弟み鈴
 菜鈴四郎と呼ぶ者も。前頃より人々と。此山寨の楯籠る。斯る道ある

世の中の賄賂の富る家み押入財を奪ひく世と渡り。身の樂を究まば。
 世の傍る郷里あると吾棟梁と憑むべし。才智の富る人のみが彼御社
 小額のみ。往來の人の才を試み。吾棟梁は憑まんものと日毎慕ひく待折
 々。今日幸ひ是計智仁兼備の君と得く。吾黨の悦とげぬ磐石の
 磐。去來や同盟の契約せん。大盃とさく。巴治郎は不測に斯る
 光景と始くゆ。公の中み大なる故馬を各み打向ひく。その件の御社の懸
 け。繪馬の人々の。さるり公を籠めひく。人の心を様えんと懸置のひ。繪馬
 する。是はさるを卒介。僕いさう画と字び。さるり恥りくゆ。さるり
 不覚の首を画添へ。さるり量り。業の体。且の中々才なく。是る賢
 人々の首領とある。器のめ。又従ひく山賊と成へた勇も。さるり

此の巻末

見許ゆへと打佐ま。鈴四郎うちゆり。大口ゆき。呵々として笑ひ。宜は
 尚更み底意あつてゆらる。まて件の繪馬こそ形鳥とるめ。鳥の形と
 首無ま。何鳥とも。悟り知る。画のさぬ。其が首と画添く。就鳥の形と
 其と知る。御意の甚憑。とん受る。今更の。賢ふるの
 意を説かぬ。流石面取事。樹ふむ鳥の。欲めう。見ぬ。鷹
 相。世の謎との。憚ら。爪の長。吾黨が業も元来深山邊の。緑の
 林。住る。是山賊とる。後。首の無。悟。此活業
 の成。君が如きの才。有らぬ。首も画添く。世を怪る
 其の。就鳥て。文字の首字と。二箇別ち。訓み。京と。むと
 の。此山塞。聚まる。吾黨と。衆共。北条父子が。邪曲。京と

然ゆる者共。是山賊の。と。元石の意と。悟ら。鳥と
 字の首と。就鳥の。山屋を。訪め。目。各仰
 斯る才智の君。今此山塞。在。巴等が。の幸ひ。と。悦び
 勇。一個々。巴治郎が。前。畏。平家の。残黨。顔。赤
 沈醉の。相九郎と。呼ぶ。者。と。を。續。傍。某が。弟。勝。倉の。茂。後
 治。婦。現。と。は。ち。の。果。と。後。方。引。坊。墮。落
 の。頭。分。六。志。梳。坊の。赤。兵。衛。老。物。鯛。大。劍。珍。唐。次。郎。と。名。乗。と。名。對
 面。の。畏。哀。英。智。と。施。此。山。塞。を。富。へ。入。る。ぐ。小。皿。を。隙
 採。指。は。く。巴。治。郎。公。も。斯。な。山。賊。赤。の。羣。居。る
 中。へ。陥。入。り。て。今。更。是。く。遁。ま。んと。中。々。遁。ま。る。と。さ。を。ひ。と。や。う

此の山塞

十三

詞小従ひ。果等か言と承引く。介して後よ。た間小遣を退らんと公を定
 めく。皆々小打向ひ。こをり迄。宣ふ。吾も衷む。物の数ぬ。あ
 ぶ。已も武上の端ゆく。従来。平家。仕。治。乱。家。止。ひ
 世と刃。あ。幸。左。右。各。首。領。と
 あり。才。あ。庶。幾。人。々。の。坐。の。片。端。も。免。あ。叶。ひ。新
 水の。旁。も。あ。仕。と。鈴。菜。鈴。四。郎。斯。數。々。宣。へ。今。日。と
 先。是。く。在。矣。今。夜。も。さ。る。富。る。家。は。吾。黨。の。押。入。と。財。宝。餘。り。取
 来。と。連。り。兼。く。已。心。構。と。貴。君。今。夜。の。手。始。一
 働。と。一。更。總。く。今。夜。の。功。は。よ。り。各。其。坐。を。定。む。先。と。公。と。結。び
 ほ。盟。約。せん。と。互。酒。を。酌。り。果。の。舞。中。謠。小。中。各。々

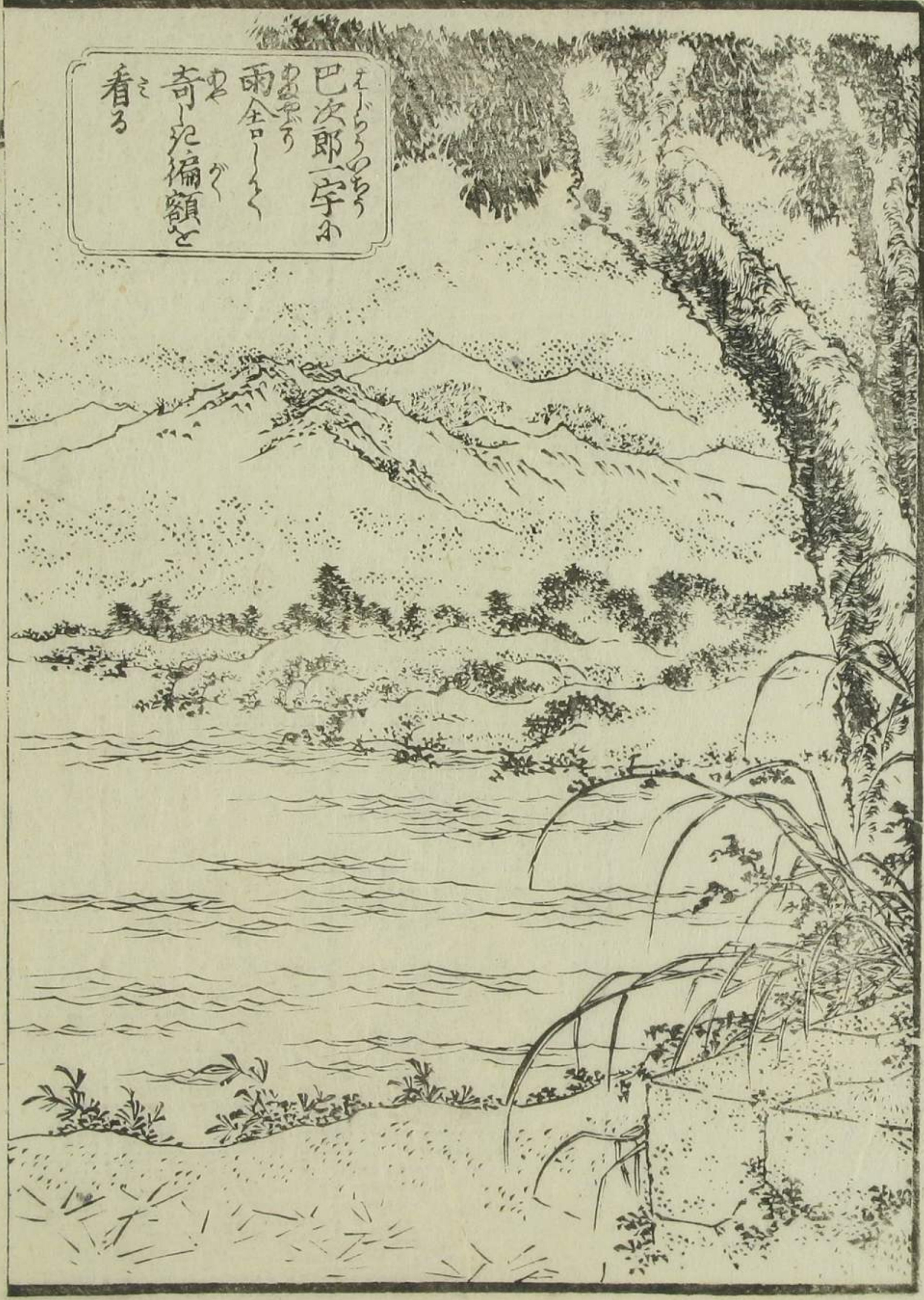
酔を。尽。け。る。爰。小。同。国。長。世。の。郷。る。村。長。某。甲。八。縣。令。と。公。と。入。を。北
 条。父。子。小。諂。ひ。く。農。民。の。あ。ぬ。過。役。を。下。と。責。め。財。を。貪。り。暗。略。小
 富。る。家。も。山。賊。等。兼。て。も。彼。村。長。が。家。小。押。入。沙。金。の。限。り。と
 奪。取。ら。ん。と。光。景。を。伺。ひ。置。ま。其。日。も。既。小。暮。行。く。速。九。ッ。小。近。く。更
 ぬ。各。の。往。ん。と。夜。半。の。比。及。支。度。一。得。物。々。を。携。へ。手。頭。を
 定。め。今。参。下。の。彼。巴。治。郎。と。伴。ひ。く。彼。山。塞。を。出。け。る。巴。治。郎。猶。豫
 不。定。必。く。の。道。ま。え。隙。も。あ。ら。ぬ。詮。方。も。何。処。と。も。知。れ。ぬ。案。案。の
 率。り。ま。く。従。ひ。あ。く。山。路。を。九。三。四。里。余。も。越。来。つ。ま。向。と。只。見
 松。樹。の。茂。り。竹。垣。を。結。巡。ら。の。廣。ら。う。造。り。あ。る。家。居。あ。り。
 げ。の。富。る。家。と。ま。え。く。母。屋。の。後。向。へ。土。藏。の。棟。を。並。ぎ。建。つ。の。前。面

ある筑地と恰も白地の布と一面ふ引もまゝ如ふ見え一基の門を構
 る。山賊等ハ必は彼所の堀に寄り寄るとかえり一個の賊もまゝくと
 垣と依ひく内へ飛入り直ふ門を引開けば各内へ籠入りまゝに土蔵
 の後方の土を穿ちて押入りの積貯へ沙金の篋を各荷ひ出さる。門の
 外面へ繰出しの働く折も此物音を聞きけるらん賽者者と家内一度ハ
 駭ごころ。偷見ア入入りて呼ぶ声ハ數多の従者等公泊りと棒千
 切木手々ハ携りへ走出つ押取巻ハ偷見等ハ其人音とせりる。手速く人
 數を引纏め沙金の篋を携りへ先へ落して四五人の跡ハ止り太刀引抜き
 近はき寄く怪我まゝと遮る従者ハと切拂ひ目もとも知らぬ間夜の
 小跡々々々野踏山路何地とも尋ねぬ巴治郎ハ始り母のりり

公みかり。見間ぬ。逃往んと伺ひ居る。賊人等の吾公と免さ
 せん。詮方あつて震ひく。俱ひひる。門の内へ走入はまじと中々ハ
 吾魂も刃ハ添つて。必ひも。今従者どものまゝ取
 捲光景ハ大さ怖ま。陰の刃と潜り。人静り。其後ハ一個
 蜜ハ逃歸らんと。烏羽王の闇のあやしの者。外むる
 人のあつんと。羨や彼処と伺ふ。籠まる庭の茂と。幸と走り
 込。刃と潜り。伺ひ居る。従者等の賊と追逃。彼方此方と探
 は。松明さげく声。庭の傍の植込。心憎け。彼間ハ隠
 居る奴のや有らんと。声。巴治郎ハ大さ驚き。物音ハ
 足と踏外。前ハ池ハと墮。従者等の響く物音ハ

巴次郎一字小
 雨全
 奇丸編額と
 看る

它勿吾族白



虫持言卷

巴次郎

十五

彼處ふ曲者ありとく。破落々と走來り。松明さげ只見く池の
 中ふ一個の男墮入く。半身泥ふ塗まる。蠶居ま不從者どの池飛
 入り引捕へる。先一個へ捕へると響き笑ひて引來り。家の菅莊ふ是と
 して其奴へ其所の松の樹ふ括つら。明行ハ縣令の許ふ訴へ。よく
 公しく禁め置よと。いへ從者等の畏ま。松の太樹ふ巴治郎と高千
 小手ふ縛は。尚も遁るるのわんと。足械を打懸く。僕等の謚さつ。
 彼奴が業ふ驚つこと。臥間もあぬ短夜よわ。夢をぞ夢へはるとく。已
 く臥床よ入り。再熟睡ぞあつけ。ことごと斯る間ま。いふ彼土藏
 の土と穿ちく。數の沙金を奪ひて。其夜の意もはつさけり。且説彼荏弱
 表太ハ此頃及ハ未鎌倉在く。和田胤長ハ仕へ比るり。近江國夏身

郷といへる処ハ主君胤長の由縁ありけ。其処へ使とく。從者一人を
 率く。彼所不至と。其歸ると此長世の郷る。村長の家ハ宿り。り。が。
 夜半の比及何や。ん人の声。罵く。笑えけ。表太目覚く。耳を敲て
 ば。偷見の入り。て。立騒ぐ。ぞ。表太若此所へ。の來。んか。と
 起直り。身構り。在。る。暫く。物騒。と。音靜。と。後僕等が声
 とく。嚴捷くも逃往。奴を。か。と。先一個を捕へり。夜明ら。憂
 目。符。て。ん。と。口。ろ。ふ。の。皆。々。入。り。と。臥。ぬ。氣。辞。ま。表。太。を。偷。見。ふ
 う有けん。と。寐。り。が。暫。時。と。厠。へ。往。ん。と。起。出。つ。燈。火。と。
 ぞ。只。見。く。何。や。ん。庭。る。松。の。樹。の。人。の。イ。居。る。と。ぬ。こ。と。
 ぞ。や。う。ハ。偷。見。の。忍。び。ま。り。と。伺。ふ。め。と。燭。火。指。出。と。逃。と。ぬ。

ひかり 一個の夫を縛りて。松の太樹に繫ぎて。表太公をさして。先づ僕
 らの捕へり。立騒ぎ。偷見をそ有べし。さるも肝太の忍
 みの曲者。目近く傍に立。伺ひ見。六年の頃。二十歳。さるも
 足る。艶夫。其さる賤。か。高手。小手。縛ら。甚。龍鐘。哭。居
 う。表太。熟。打。公の中。必。善。悪。げ。面。貌。ゆ。々
 倚。ぬ。の。う。此。奴。が。光。景。中。々。偷。見。と。の。時。彼。者。の
 表太。公。近。付。面。と。白。う。背。向。声。と。潜。め。表太
 向。ひ。ひ。け。君。此。家。の。主。在。け。何。人。も。さ。あ。知。る。も。是
 浅。ま。と。五。口。入。と。情。と。一。偏。公。の。已。の。彼。処。の。英。多。の
 里。小。母。と。衆。も。任。者。さ。此。程。老。母。疾。一。臥。く。左。右。食。の。進。ま。る。責。て

川邊の魚をぬく。母小供めんをり。川邊必出く釣ま。折あ。く
 魚と厚を吾と忘。水上へ次第々々。逆登り。下音も雨降
 詮方。彼。の。社。入。雨。と。凌。計。を。深。山。小。率。ま。
 山賊。群。入。通。人。便。と。失。ひ。く。爰。至。り。始。終。落。の。残。さ。打
 語。り。の。過。と。病。臥。母。と。捨。置。く。今。偷。見。の。名。を。負。ひ。
 死。す。り。の。厭。の。も。母。人。是。と。は。め。の。哭。沈。ま。く。老。先。の。あ。ぬ
 命。も。絶。ぬ。と。思。へ。と。五。口。入。是。を。索。目。の。耻。め。浅。ま。く。朽。果。る。か。と
 思。ひ。侘。公。と。推。し。ぬ。と。搦。口。説。け。打。泣。涙。墮。る。泪。を。拭。り。ん。と。ま。ま。と。袖
 も。縛。の。索。は。空。く。括。ら。ま。て。を。顧。る。自。背。向。く。哭。く。と。表。太。へ。熟。々
 眺。め。く。顔。小。哀。を。催。し。の。面。と。尚。も。打。ま。の。う。く。げ。ぬ。此。奴。が。自。貌。語。り。出。あ。り

